**日本英語文化学会第22回全国大会 研究発表レジュメ**

**研究発表（1）：第1発表会場（132教室）**

小学校英語教育：動機づけに関する一考察

―小学校学習指導要領（外国語活動、外国語編）を例として―

髙橋 強（東海大学）

　今回の発表は、小学校学習指導要領（外国語活動、外国語編）において、動機づけに言及している項目がほとんどなく議論の余地が残るところであり、この点を踏まえて、小学校英語教育における英語習得と動機づけが如何に重要なものであるかを動機づけの理論に基づき考察を加えていくものとする。特に、内発的動機づけと外発的動機づけの重要性とその比較について検討し、小学校学習指導要領で述べられていることに付随して、どのように実際の授業でのインタラクション活動に生かしていくべきなのかを検証することで、この問題に関して明確な解決策を提言していくものとする。また発表者が視察した小学校での動機づけを高める指導法や動機づけを高める英語プレゼンテーション並びにWTC（Willingness to Communicate）やCLIL（Content and Language Integrated Learning）などについても、本来であれば小学校学習指導要領に付け加えなければいけない項目であるにもかかわらず触れられていないこと、また家庭学習の重要性と動機づけとの関連性についても述べていくものとする。今回の発表において、小学校学習指導要領（外国語活動、外国語編）を補完する意味で、様々な事例を基に動機づけの観点から深く考察し、小学校学習指導要領の素晴らしい点や今後の改善点について、発表者自身の経験を踏まえながら発表していくものとする。

**研究発表（1）：第2発表会場（13D教室）**

『瘋癲老人日記』文学から映画へ―女神に溺れるパラフィリア老人―

清水 純子（法政大学）

谷崎潤一郎の晩年の名作『瘋癲老人日記』のパラフィリア老人の生態をめぐって、文学から映画への翻案化について論じる。映画は、日本版は1962年若尾文子と山村聡主演、外国版は1987年イスラエル版『Tanizaki　吐息』を扱う。

　御年77歳の主人公であり日記の書き手の卯木督助は、同居する嫁の颯子にエロスを感じて幼児のように甘え、つきまとうパラフィリア老人である。パラフィリア（paraphilia）は、英語で「性倒錯」を意味する、俗に言う「変態」である。パラフィリアの語を分解すると、「偏愛」(para)＋「引きつけられる」（philia）になり、性的興味の対象や種類が変わっている、あるいは文化的に統計的にみて正常でない性的趣向という意味になる。しかし現代的な意味においてパラフィリアの嗜好を持つ人が「変態」「性倒錯者」と呼べるとは言えない。性的倒錯の基準や、正常と異常の境界線の線引きは、時代と文化によって異なり推移するからである。

　本発表では、60年近く前の小説内の日本の生活様式、ジェンダー、家族関係の違いを考慮に入れながら、日本におけるその映画化と海外の映画化について比較検討する。『瘋癲老人日記』が21世紀においてどのように評価され、解釈されうるかその可能性についても論じる。高齢化社会を迎えて老人のセクシュアリティへの理解を促す。

**研究発表（2）：第1発表会場（132教室）**

Prior Knowledge and Perception: A Case of Early Bilinguals

 渡辺 英依美（カーディフ大学大学院修了）

　This paper will demonstrate how accurately Japanese-English bilinguals are identified as L1 speakers of English, and whether listeners’ prior knowledge of speakers’ language background may affect the rating of their native-speakerness. Two groups of judges listened to a passage read bymonolingual English speakers, Japanese-English early bilinguals, and Japanese late learners of English. One group had been informed of the speakers’ language background beforehand, while the other had not.

　Both groups correctly identified the monolingual speakers and the late learners as native and non-native speakers, respectively. For the bilinguals, however, the participants responded differently depending on their prior knowledge. The informed listeners were more sensitive towards non-English features in the speech, real or imagined.

**研究発表（2）：第2発表会場（13D教室**）

Web Classを利用したオンライン協同英作文演習の分析と今後の課題

伊藤 由起子（東京電機大学）

現代の学生にアピールするような、学習者がスマートフォンやパソコンを使って事前学習できる演習をパタン・プラクティスの拡張演習を参考に独自に考案し、3年間実践した。その方法は、ポータルサイトの「掲示板」機能を使って毎週１つのテーマに沿った英文をクラス全員で作成するというものであり、24時間オンラインで協同学習を行う。1人の投稿を1語に限定し、学習者には「前後の文脈を考えながら」、「文法的に正しい語を投稿し」、「できるだけ英文を長くし」、「誤りがあったら直す」ように指示した。教員は完成した英文について授業で講評を行い、解説する。

　3年間で完成した160タイトルの英文のエラーを分析し、学習者コーパスを作成し、学習効果を分析したところ、学習者がすでに概ねできていることは、文型、語順、関係詞であり、演習により概ねできるようになったことは指示代名詞の選択、カンマなどのpunctuationの選択、後置修飾によって英文を長文化することであった。学習効果があまり得られなかったことは、冠詞の選択、文意の把握、時制であった。毎期行われた学生アンケートの結果では、参加率も満足度も大変高く、自由記述においては、「ゲーム性に魅力を感じた」という意見がある一方で、次に投稿する人への配慮から「簡単な語を投稿する」と回答した学生が多く、本演習では難解な単語（表現）を学ぶには適さないことがわかった。これを改善することがこれからの課題である。

**研究発表（3）：第1発表会場（132教室）**

トニ・モリスン『タール・ベイビー』におけるシェイクスピア『テンペスト』の受容

—ヴァレリアンとプロスペ ローの関係を中心に―

福島 昇（日本大学）

　『テンペスト』のプロスペローは劇の最後で「この悪魔の化け物めは残念ながら私の下僕だ」“this thing of darkness, I / Acknowledge mine.”と言う。ローリー・レニンガーが指摘するように、“acknowledge” は自己発見、自己暴露、罪の告白、あるいは犠牲を払って責任を受け入れることを暗示している。プロスペローは、「この悪魔の化け物」は私自身だと仄めかしているのだ。プロスペローの告白は『タール・ベイビー』に登場するヴァレリアンの「罪を知らぬままの人間であることは、神の前では罪なのだ。非人間的であるがゆえに、人でなしなのだ」を想起させる。モリスンは、ヴァレリアンに限らず白人はアメリカ先住民や奴隷の子孫であるアフリカ系アメリカ人がこれまで受けてきた人種差別、民族問題に無知であったと言う。人種差別、民族問題に無知であることは「神の前では罪なのだ……」と仄めかしているのだ。プロスペローがキャリバンとの暗い絆を認めているように、ヴァレリアンも自分ほど忌まわしいものはいないと自認している。つまり、サンのようなキャリバンから見れば、ヴァレリアンこそ野蛮人を表象していると言えるのである。

　本発表はモリスンの『タール・ベイビー』がいかにシェイクスピアの『テンペスト』を受容したのか考察する。

**シンポジウム「大学の英語教育を再考する」：第1発表会場（132教室）**

　英語は、国内のほぼすべての大学で「語学科目」として教授されているが、その意義や目的について議論が尽くされたとは言い難い。また近年はCEFR、EMI、ELF、CLIL等、言語教育に関わる概念が正確な理解なく一人歩きしている観もある。ここでは「何を、何のために、いかに教え、学ぶのか」という言語教育の原点に立ち返り、大学における英語教育の在り方をフロアと共に再考する。講師の方々には、狭義の英語教授法を超えた視点から、例えば、言語運用力と測定、プレゼンテーション、英文学教育、言語イデオロギー等との関連で、新たな知見を提供いただきたい。

発表１ 母語の運用力と外国語としての英語の運用力の関係性

　中井 延美（明海大学）

大学の英語教育というテーマは、本会会員の最大公約数である。本発表では、シンポジウム全体の開催趣旨を説明したあと、言語学の立場から、大学の英語教育に対する発表者自身の主張を述べる。第13回全国大会（於駒澤大学）では、「大学における一般教養としての『英語』を考える」というテーマでシンポジウムを開催した。そこから9年を経て、本シンポジウムで「大学の英語教育を再考する」に至るまでの昨今の動向を振り返る。一般的に、学習者の英語運用能力を測定するのに、特徴の異なる種々の検定試験が存在するが、実際、AテストとBテストの測定結果を客観的に関連づけようとする試みには、妥当性の点でかなり問題がある。当然のことながら、大学の英語教育は、検定試験間の相互比較とは異なる次元で議論されるべきある。後半では、母語の運用力と外国語としての英語の運用力の関係性を踏まえ、大学の英語教育において、学習者が、外国語である英語の知識（中学・高校で身につけたfragment）を改めて整理することの意義を検討する。

発表2　良い英語プレゼンに関するメタ認知的知識の違いの検討

―英語母語話者と日本語母語話者の大学教員、日本人大学生を比較して―

　　　 表谷 純子（神戸学院大学）

　大学での英語教育は、「大学を卒業したら仕事で英語が使える」という文部科学省（2003）の達成目標やグローバル化の波を受け、より実用性の高い英語力を醸成する役割が求められている。英語プレゼン力は仕事で英語を使用する際に求められる能力の1つであり、大学の英語授業でも英語プレゼン課題は多く取り入れられてきた。

　英語プレゼンの為の大学生向け教科書が多く出版されている一方、英語教員が何をもって「良いプレゼンである」と判断するかについての研究は非常に少ない。大学英語教員が持つ良い英語プレゼンに対するメタ認知的知識を探ることは、英語プレゼン指導においても重要であろう。Omotedani (2018)では、 英語母語話者の大学英語教員(NETs)と日本語母語話者の大学英語教員(JETs)、日本人大学生(Ss)に対して「何ができていると良い英語プレゼンなのか」という調査を実施し自由記述で回答を求めた。本研究では、Omotedani (2018)で得られた自由記述内容を24項目にまとめ、NETsとJETs がTOEIC L&R 約450点（日本の大学生の平均点）レベルの学生に求める「良い英語プレゼン」とSsが考える「良い英語プレゼン」の違いについて6件法のリカートスケールを用いて分散分析を行った。その結果SsはNETsとJETsに比べ英語プレゼンでの非言語コミュニケーション力を重要視していること、NETsはSsより文法力や論理的な展開を重要視していることが示された。本研究では、これらの調査から得られた教育的示唆について報告する。

発表3　Reading Early Modern English Poetry in University Classrooms

　　　　上石 実加子（北海道教育大学釧路校）

　In 2018, the Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD) summarised the outline of Education 2030, which surveys what appropriate education should comprise by 2030. The OECD regards acquiring “transformative competence” as the learning framework by 2030. We are facing unprecedented challenges driven by accelerating globalisation and a faster rate of technological developments. Especially in Japan, due to the decline in population, students should acquire a Humanity Quotient (HQ) rather than an Intelligence Quotient (IQ) to be compatible with the artificial intelligence (AI) society.

　In this presentation, I am going to discuss English literature education in university classrooms, especially the reading of English classical poems, and how effectively students achieve transformative competence as well as HQ.

発表4　The Inner Circle Orientation within the Japanese EIL Framework

　　　　渡辺 宥泰（法政大学）

　The concept of English as an international language (EIL) and the Inner Circle orientation have been juxtaposed with the education policy of Japan since 1947, when the *Suggested Course of Study in English* was issued as the first set of national guidelines for secondary education. By observing highly proficient users’ attitudes towards Japanese-accented English (JAE), this paper will cast light on how such users manage to strike a balance between these seemingly contradictory values.

　121 undergraduate students were given a questionnaire and were subject to a semi-structured interview. All students are enrolled in the same university liberal arts department, where all courses are taught in English as a medium of instruction. The resulting analysis from the data collected reveals that despite their awareness of, and constant exposure to, a wide range of World Englishes, the respondents still strive for a native-like pronunciation. JAE is held in very low regard, even more so than other East Asian accents. The discussion around EIL and native speakerism should take into account the ideological climate characteristic of each Expanding Circle country.